

2000 年 9 月に国連ミレニアムサミットにおいて、参加 189 カ国は、21 世紀において国際社会の目標となる「ミレニアム宣言」を採択した。その「ミレニアム開発目標<MDGs~Millennium Development Goals>とは、①極度の貧困と飢餓の撲滅、②普遍的初等教育の達成、③ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上、④乳幼児の死亡率の削減、⑤妊産婦の健康の改善、⑥HIV/エイズ、マラリア及びその他の疾病の蔓延防止、⑦持続可能な環境の保全、⑧開発のためのグローバル・パートナーシップの推進一である。これは、国際医学検査技師協会(IFBLS)が 2007 年に“世界医学検査デー”として掲げた「2015 年までに 5 歳未満児の死亡率を 1990 年水準の 3 分の 2 に減少させる。」「同じく妊産婦の死亡率を 4 分の 3 に減少させる。」、加えて、当会が予定している「エイズ撲滅啓発活動」「ジェンダーの平等の推進啓発活動」は国際的視野にたつ事業といえる。

記念シンポジウム「開発途上国の求める医療技術＝JIMTEF 事業を通して見えるもの＝」では、JIMTEF 河合忠理事長を座長とし、JIMTEF 顧問小澤大二氏、元青年海外協力隊福祉分野技術顧問田口順子氏そして元 JICA 専門家として活躍した下杉彰男当会名誉会員がパネリストとして、開発途上国の現状及び必要とする医療技術について討議した。小澤氏は、「…世界はグローバル化の進展とともに、年間 20 億人と推定される航空機利用客や大量の物資が国境を越えて移動している。この状況は、病原体の拡散を加速させ、国境を越えて伝播することになる。そのため、国内の医療体制や新興感染症

に対する情報や知識を備えることが必要となる。すなわち、それが国益にもつながることとなる…」と述べた。

理学療法士である田口氏は、インドネシアにおけるリハビリテーションプロジェクトを紹介した。同国の障害者及び医療福祉に関する諸制度の実態調査にはじまり、村落への在宅指導訪問、研修生の指導などであった。

下杉氏は、「インドネシア南スラウェシ地域保健強化プロジェクト」参加を通じた JIMTEF 事業との関わりを話された。このチームの臨床検査部門の拠点である保健省中央ラボ局及び州立ラボセンターを紹介した。巡回指導するなかでは、わが国から寄贈された医療機器が満足に使用されていない状況に「保守管理の重要さ」と言語<機器解説書>の問題が重要であるとした。技術援助は続くが、試薬などの流通の難しさと重要性にも言及した。これら異文化国への協力には、その国の文化を知ることが重要である。“異文化を理解し生活習慣を知る”ことが国際協力の一步であると結んだ。

最後に、河合理事長が「医療機器の提供だけでは、何もならない。それを効率的に使用するノウハウを提供・指導することが重要である。来年度からは、新 JICA が発足する。実際の NGO としての活躍を期する。そのためもあり、国際医療技術協力を考える会を発足した。」



と結んだ。いずれにしても目先にことにとらわれず将来を見据えたグローバルな心が必要であろう。

【高田鉄也】

追悼

藤原ムチ先生を偲んで

愛媛大学医学部附属病院 診療支援部 村瀬光春

元日臨技役員の藤原ムチ先生が 9 月 22 日、病氣療養中のところ享年 73 歳にて逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、東京女子医科大学附属病院、村上レファレンスラボラトリーに勤務され、昭和 63 年(1988)から平成 7 年(1995)まで日臨技学術担当理事として活躍され、数多くの業績を残されてきました。

大きな業績の一つに平成 7 年から始まった「輸血認定技師」制度の発足に尽力されたことです。臨床検査技師の質の向上をいつも念頭におき実践すると同時に後進の育成に心がけ全国各地で開催される検査研究班研修会に積極的に参加して会員と交流を深められていました。日本輸血学会において赤血球型検査(赤血球系検査)ガイドライン作成委員会の委員としてもごく最近まで活躍されていました。

私が最初にお会いしたのは昭和 63 年(1988)に四国で開催された全国血清検査研究班研修会であったと記憶していますが、その時の容姿は「さすが東京の人」を思わせるチューリップハットにスカーフをなびかせた姿は印象的でした。また開会の挨拶では日臨技の将来を見据えた考えとして、これからは学術面の充実が是非必要であると熱く語られ、特に若い人に向かってその期待の大きさを投げかけてくれました。

そして自らも学術充実に努められ昭和 63 年(1988)に第 23 回小島三郎記念技術賞を受賞されています。

先生を一口で表現するならば「情熱のお姉さま」、「輸血検査学のパイオニア」といった感じの人でした。

平成 2 年度から日臨技役員となった私に「弟よ」といって親しくしていただきました。先生は語学が堪能で英語の他にスペイン語が得意な様子で、「藤原沙理奈」の名前で通訳をされていたことを伺っていました。

国際担当理事としても重要な働きをされ国際学会、アセアン学会にも良く出かけられ、また JICA 研修生のお世話も親身になってされ、外国の研修生からも「ムチ」と慕われて談笑されていた姿を今でも思い出します。

現在、日臨技が国際的なリーダーとして認められてきた礎を築かれた一人であります。しかし、数年前に病魔に襲われ治療に専念せざるを得なくなり、最近では病氣療養のため故郷の秋田に帰られたと聞いていました。

誠に残念ではありますが、今はあの天真爛漫な明るい笑顔もチューリップハットを被った姿も見ることはできません。どうか安らかに眠り下さい。

合掌